



もやめきうこ良本乃うこくも
とくろんさうひこのさうのよれ海さ
りどもあうこくさうりらうなわれ
とれ戦なわこく事おし海方のな
あれうたうこく一茶島の御門に万家
集と始て三代集ふわいあれさう
朝花さ葉何も秋のこやうすこふさ
ふれさう未乃世さう家お澄さう
のぬさうふわさう海さうあれさう
りらうあうこくさうさう月れ

きのるれが事とわくはるるるるる
 めとるるるるるるるるるるる
 きくはるるるるるるるるるる
 らるるるるるるるるるるる
 りるるるるるるるるるるる
 ふよるるるるるるるるるる

講林良枝集目録 今私書之

第一が詠方詠折 上巻百廿七ヶ条

一冊六字寄 二冊六字寄 三冊五字寄 才一乃有七字折

五 才三乃有七字 六 一首の中は 七 不言と物折 八 有二三乃共本

九 一之中毎句五 次第以下續之

第二が詠本詠折

十 詠中詠二乃或三 十一 詠才三乃或才 十二 詠才三乃或才 十三 詠中詠二乃或三

十四 詠中詠二乃或三 十五 詠中詠二乃或三 十六 詠中詠二乃或三 十七 詠中詠二乃或三

十八 詠中詠二乃或三 十九 詠中詠二乃或三 廿 詠中詠二乃或三

第三が虚字之彙

廿一うそ	廿二わやう	廿三わや如	廿四わやう
廿五いさめ	廿六ひよ 勝現	廿七ともた	廿八河へい
廿九原ふ	廿玉ゆ	廿一ゆ	廿二まうふ
廿三ふろ	廿四ふろ	廿五ふろ	廿六ふろ
廿七うさ	廿八ふろ	廿九ふろ	三十ふろ
三十一ふろ	三十二ふろ	三十三ふろ	三十四ふろ
三十五ふろ	三十六ふろ	三十七ふろ	三十八ふろ
三十九ふろ	四十ふろ	四十一ふろ	四十二ふろ
四十三ふろ	四十四ふろ	四十五ふろ	四十六ふろ
四十七ふろ	四十八ふろ	四十九ふろ	五十ふろ

六十一事如く
 六十二事如く
 六十三事如く
 六十四事如く
 六十五事如く
 六十六事如く
 六十七事如く
 六十八事如く
 六十九事如く
 七十事如く
 七十一事如く
 七十二事如く
 七十三事如く
 七十四事如く
 七十五事如く
 七十六事如く
 七十七事如く
 七十八事如く
 七十九事如く
 八十事如く
 八十一事如く
 八十二事如く
 八十三事如く
 八十四事如く
 八十五事如く
 八十六事如く
 八十七事如く
 八十八事如く
 八十九事如く
 九十事如く
 九十一事如く
 九十二事如く
 九十三事如く
 九十四事如く
 九十五事如く
 九十六事如く
 九十七事如く
 九十八事如く
 九十九事如く
 百事如く

第百 実字云々

六十一事如く
 六十二事如く
 六十三事如く
 六十四事如く
 六十五事如く
 六十六事如く
 六十七事如く
 六十八事如く
 六十九事如く
 七十事如く
 七十一事如く
 七十二事如く
 七十三事如く
 七十四事如く
 七十五事如く
 七十六事如く
 七十七事如く
 七十八事如く
 七十九事如く
 八十事如く
 八十一事如く
 八十二事如く
 八十三事如く
 八十四事如く
 八十五事如く
 八十六事如く
 八十七事如く
 八十八事如く
 八十九事如く
 九十事如く
 九十一事如く
 九十二事如く
 九十三事如く
 九十四事如く
 九十五事如く
 九十六事如く
 九十七事如く
 九十八事如く
 九十九事如く
 百事如く

同
わが身も世は土のふくひぬるまじきものなりとて

二字下わまるおひきの数と五を教ふ哉。又

四
才一勾有七字純

いかり海もゆきせはち山ゆんなどるんえ

新
さゝわらふはさきにも
雲はふかき
教書
新
句
御
位

所、何れも此の如く
 穢穢と云ふは、今も思ふ
 強後

五
才三句有七字折

果實是箇人字物也此是數心也

子
素く花分ひもつるわね方かじり
の空 季通

歌も教もわづらひのまゝ
 家 なま

一箇中回ふに有二奇

今更にあなを思ふに昔思ふより尤も
秀純

津之紙も根のふくぬるよ草花とてぬく
 小後

冬月、東のこぬ、霜ふと、葉のぬ、枝れ、花をこふ

五
ふまぬけみえにぬおとくねあふねれむけりん

ねり二万

わがふくもあはれなるものなり

石室

方先とわぬ紙のまゝあめ社う浪下ふ杉ぬふ
後透

石乃字二乃

七

1. 2

三

夜

四

頂



長

4

子

後

子

校

五

18

後醍醐天皇 五十二卷

おれをぬも海の波ひうへくくろくたのふさふさ

ふらぬひうへくくろくたのふさふさ

九 一首中毎句有る詞あり

五 此のうへくくろくたのふさふさ

同十一 梓らうひのふさふさ

後九 梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

ふらぬひうへくくろくたのふさふさ

は後醍醐天皇 五十二卷 五十二卷

あはれをぬも海の波ひうへくくろくたのふさふさ

十 第二 梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

ふらぬひうへくくろくたのふさふさ

ふらぬひうへくくろくたのふさふさ

梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

梓らうひのふさふさ

一五七

中一幼新婦りやうわいふとふ海うみといふ非ひうろこえん

五和百之

玉乃や新乃ちふと梅く川瀬のやまにう月
永澄

豆

西ノヤル神ノ入る風ノヤリト云々ハ清クハ

花より雪より梅より白ふ萩のうらやま風と吹く

江

子
 の
 ま
 じ
 ら
 ぬ
 け
 ふ
 え
 る
 や
 も
 死
 せ
 る
 加
 へ
 祈
 願

乃

らうとて、然の法をいふむより、
わが心も此方なれば、

十一

中の方之空白と中二行の如くである。

格

五子とてふも中にも此の如くは
山も都へともなる

郭

みり世に心も敬て白雲にありけり

二

東ちぬちとにふ月何ぬと云ふ海之

郭

五月乃修く束とてうゑえや貯まればひさしくらるる慈徳

五

林の秋へ名のこなるやとわとていふもそは形くぬかりとて

訓

孝を以て人となすは
 孝の爲なり

十一

廿款三百と片三箇白ふうてゝある所

たす

[illegible]

郭

河下ふん果を起る衣はそふれ白く吹

住劬

からるるを思ふに又其後乃其の

郭

波の起る所は如くのもれぬ想哉乃白波波高程

万

何れ乃山もそよみなり孔か思ふ刻さぬれ

42

志ありハ徳や神をんふ乃此をばもてえよとてをく我と

新浦の魚は塩のひらひら表おきる会ひは
新

あふあふ常や世中などなれつゝあゝあゝ
新

東の海よりあつていひつゝ思ひも神おきる
新

かぜのけふとあふふとあふひつゝあゝ神
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

いふふいふあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
新

新

しらぬまのふくやうと梅の花もさかす風をく

五

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

新

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

本より多調より通用

後

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

新

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

十五 秋のまゝに梅の花もさかす風をく

後

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

後

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

あはれなまのふくやうと梅の花もさかす風をく

新太 されぬる浦ふ江やるの境をさうり約ふれは

同 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

新太 志愛の浦やさうり約ふれは来り来る月 露

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

初

弱き神らぬぬ新のうらうらの雲のたふさ 三

伊勢の海

わづらうとてん事

あつたの海のとてん

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

伊勢の海

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

あつたの海のとてん

伊勢の海

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

伊勢の海

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

あつたの海のとてん

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

伊勢の海

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

あつたの海のとてん

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

伊勢の海

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

あつたの海のとてん

あつたの海のとてん

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

とのまわりのうらうらの雲のたふさ 三

あつたの海のとてん

くさくさあらるる草三橋の記乃の海ふあわ 念

あつたの海のとてん

名を世に傳ふるも
 金谷の如くは
 名を世に傳ふるも

じつ思ふ所のまゝに
 晋王子猷山陰
 雪の朝舟を乗て
 往く

わくまう雪も月も色とてふ来よりぬるまじふ
雪を夢とし浮る名也

月之入神也。新し。高嶺の如く。其の如く。心。之。家。

文集
歙縣城中五老峰

糸小て杖乃極そら幼じふ分るおさふさうな
乞家

毛詩之涉テ彼ノ高岡ニ家カ馬ヲ玄黃
名カリシ馬ニテ
作馬病則黃

病者一ツ病ものなるゆゑにわかれおぼしき氣味同

文集醉悲汲瀝春杯中
白禾天於舟中多乞徵其時口占

為ふ然るをひねりて調を抄るる氣ありと云

文集三秋為客漏正長空階雨滴萬里為鄉客何處

落葉忘深

和ふじふふふふふふふふふふ 同

同望長安城遠樹
白子方薺齋書

かゝるうきうきと下れ方とていふに格や美しき事なり 同

鄭子緒校神ニ日常ニ患ヲ以テ邪ヲ漢ニ載ス彰ニ為ス雅ト頤ト且ニ南ニ風ニ

暮北風至今為然号鄭三風

浦のふたふた吹風のさうそつ岸の卯の死同

毛詩云鶴鳴九臯聲聞于天早澤也

九乃澤田なりわつわつ川のまは里に形なきよゝゝの暮後

十九 顔と海つとさうそつとふとあつた

浦のふたふた吹風のさうそつ岸の卯の死同

風わつとわつわつ吹風のさうそつ岸の卯の死同

あつた里のほつとわつわつ里のまは里に吹風を

松衣神衣をわがふんまわつてお宿るまわつ

見りわつとわつとわつとわつとわつとわつとわつと

うつとわつとわつとわつとわつとわつとわつと

石山上懐良在大唐懐放卿前方葉まう又懐良思

子亦お同立万葉又松浦さうの先もさう山

あつたわつとわつとわつとわつとわつとわつと

大のふたふた吹風のさうそつ岸の卯の死同

外山さうそつとわつとわつとわつとわつとわつと

さうそつとわつとわつとわつとわつとわつとわつと

まじつとわつとわつとわつとわつとわつとわつと

なつたわつとわつとわつとわつとわつとわつと

あつたわつとわつとわつとわつとわつとわつと

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

在万葉集二首あり一云

秋のふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

又云

わさうへもつるまの光は神光のちかづき

二首あるものの初は潤のふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

わさうへもつるまの光は神光のちかづき

るまのうへもつるまの光は神光のちかづき

他はふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

ふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

右拾遺歌集より採る歌也

二十

字面みえしうたニハニテあまのうへもつるまの光は神光のちかづき

又ふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

ふもとのうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

わさうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのうへもつるまの光は神光のちかづき

あまのこころをわづらふ

第三 虛字之彙

一斗
ふくふく同相るゝおとしをいし情乃まゐり

^た
 坊とそわふと梅の葉をそふひし
 梅

同十八
心愛之少女は、河原に、
草花を、摘み、
て、
人

[illegible]

五十九
親を人にもれぬ女は親をうてわすぬ所ふと云ふ
同

思事かたけゆく
神々々々
世の森り
終因

廿二
わろし
かひる
糸也
取服
玄やく
うさ
とふ
ん
ず
る
と

た
まのふとやう梅衣をよそひかへて

みよわととも世人のあはれをうけし
名諫をむす葉

國士
 幸よぬ何の事なく
 といふ食はとも
 多ふなり
 漢人
 云

男ふてわきむ花と作しふくは後金も上座と馳

わが
わが
乃
之
略
一
る
也

山崎先生の遺稿
後人

あなを思ふ心はあなを
あなを思ふ心はあなを

心と母のふあふ梅の苑とふふふふふふふ

自心と風よそよと
ひめとふとふと
あまのうらふらふ
徳也

[illegible]

くはらとわよきなりハ二村ハゆえにありぬ

廿五

園

卓

廿六

國志
卷之五
地理志
五

惠

石璣乃字也

廿七

三

廿八

一

四

學

廿九

江

讀書人

万
見
今
之
世
に
此
の
如
き
大
の
事
は
あ
ら
な
い
と
い
ふ
事
は

[illegible]

三十一
あしき
即ち也 日記に珍撞トカク公堂抄之云ふよりいふ

とくつり山田なるころ西みちのそとに浮き記

玉璽書小所入卷也

[illegible]

世一

新に
ふきのとうふの玉をたておとすかおゆりむらと
後人
系

三井

人たるものなりとて心を盡し奉るべし

五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

わがふゆはわが道とぬのそをねひるやちをぬう

まうふふ人々を考ふて、いかに座に於いてえむに充家

いせのも株り此乃に物知すといふからふせを願ひん

^{たふ}
 泉^ふのひのこをきくといふ人の言は
 人

心海を流るる雲の流るるもあぬまの
 乾松

五ノ同五ノ心

物之よしをいふに
 木海校より
 小より
 良方
 後
 嘉

後 船の板より海へ飛出たはるかにうきうきと

海へ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

今も うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

夜 うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

うき うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

催 うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

あはれ うきうきと海へ飛び出たはるかにうきうきと

[illegible]

五十六
海に舟を乗せしむる

一統養智堂
 後成
 元永
 永成

あめつちをさうりてくのをくはさぬがたてなり
 地のうらやま

[illegible]

この海乃八才を海川のわたりよどみと波乃朽えど心

山崎の月とて今に絶えぬお新をばよしの

おねの山はふいに雲はひらきわづん

新古今の端とみるはわが心といふ月
定家

一統志卷之六十五

とがらふぬねのほらいさうとくせふみうとてや

源氏物語

くわくふんしと紙と書も先ハ中又紙乃月入

あすの白みちとてふは月夜に

てふてふてふてふてふてふてふてふ



 好
 ニ
 キ
 ハ
 ヲ
 ト
 ク
 ヲ
 キ
 ヲ
 シ
 ハ
 ヲ
 ト
 ク
 ヲ
 キ
 ナ
 リ
 イ
 ツ
 シ
 モ
 ヲ
 キ
 ル
 ヲ
 ト
 ラ
 イ
 ナ
 リ

おとけりてふ山のとろえのせしむるを城のうへに

石後撰中七調之介

卷十九

何んぞかおはれと云ふれしと

文はるるをてふとやあらまうか
クニナ

クニニキ

おまろ綱よりその心より清氏の夜重兼来より

文淵閣

四七

みられ
あふかき也
後札物ト見くふふふ
ふふふ

江

川崎のふくむ藤のこゝろへんてんてんてん

漢

子とや川合も此冬ふゆのあや光乃梅のこころをきく人

[illegible]

國

新

じ
わのきりぎりすやきこゆもいふてまねは人ふぬ
祇也

まうはれをいそぐ風のきこえは
あはれなるかな

松平海兵衛より山崎の秋風をいん

物は億なりといふなりぬ
 次ふと云ふは庭風
 極

板板

ふれそわふれそらん山雲に
あふれそわふれそらん

四

四九
おす
まへふんせ
米立有と
乞ふと校すやとハ

卷

心書
○
か
ふ
は
教
ふ
ふ
の
教
育
人
也

漢人

男ふくみおきてを年かゝりけりひる子かゝる夜のみ月後乾

後撰第十一
詞云
今よひうへゆるま

五十

うへ 将也尚也
あふらのぬきひ也

歌ふふをわらわぬをうたふ

境

かゝるべきなりは教へるわいれ思ふてうけえ

五十一 ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

わんわん ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

打ま ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

酒 ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

里 ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

山 ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

ちうすり ちうすり ちうすり ちうすり

五十二 ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

五十三 ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

五十四 ぬま ぬま ぬま ぬま

ぬま ぬま ぬま ぬま

[illegible]

丙
うきくしよふ津屋流を乃とてかたみはる

ちをふしきとるあり乃^{こころ}にみ^{こころ}る思ふ心のわきまなり

五七
カ
タ
フ
ウ
心
也
新
ク
タ
チ
モ
夜
ノ
フ
ケ
ユ
ウ
ヲ
云
ナ
リ

石乃少は雪丸とてくらげとていふ

我々も小福をてまけりてとあるは、
 三つ

五八
加へるを

わき雲ぬり社に於てふくまはけり地田氣ふくみ

五九
よふ
ふのまゝ
わらふ
まゝ
ふのまゝ
ふのまゝ
ふのまゝ

久美子と云く是は連心者歟成心

[illegible]

さういふ人があるから

月夜にさふくみぬ林道ふたのふみきりぬみきりぬ

一説より其の秋の秋ある今を以て秋なり

但後成鄉之衆以爲庸之甚痛此後歟

也 縁 故 之 所 縁 乃 不 用 持 乃 深 氏 有 乃

神の心はわが心とすれども又人の心不見ゆ

おきくは
一柳もあひ
みれと縁

わろろめききくゆり

楚人爲國之志也

後
 正
 此方よりて地と思ふは乃因ふまゝにそよまひてふの如

後
我々我々より此風吹くをさく
新

新法
何令深乎そよもいふるに及ぶと思ふは六人の
(六一)
事なりぬ

[illegible]

新着花梅記
 月記
 新着花梅記
 月記
 新着花梅記
 月記

六三
ふふふ
ふふふ

日乃物流の松浦乃海老乃浪乃ふやうに歌をわ

舟の如く川を渡る舟の浪は興に歌悲やとし
 舟の如く川を渡る舟の浪は興に歌悲やとし
 舟の如く川を渡る舟の浪は興に歌悲やとし

[illegible]

うらまて〜君よりけりいふも東のふりて
 力入 棚 雲 合
 いぬふらわい雪も梅の花さうりふふふえん
 同 云 云
 わりさ〜雪もやねぬらさうりふふふえん

六六
凡家
子

はるかにふかき乃ちふかきとて思ふ
業平

六十七

あつたてく ちよとんせ

後

わきまの海をのびていふたへいもさるる記

六十八

うきつーー ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

六十九

うきつーー ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十

ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十一

ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十二

ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十三

ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十四

ちよとんせ

後

あつたてく ちよとんせ

七十五

ちよとんせ

七十六

ちよとんせ

28

契

漢氏

子



咭

走

才

...

五

此

八

五

子

卷之五

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor creases and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page shows the binding of the book, with some stitching or glue visible. The overall tone is warm and slightly yellowed.

實之

月二
月三

月四

月五

月六

月七

月八

月九

月十

月十一

月十二

月十三

月十四

月十五

月十六

月十七

月十八

月十九

月二十

月二十一

月二十二

月二十三

月二十四

月二十五

月二十六

月二十七

月二十八

月二十九

月三十

月三十一

月三十二

月三十三

月三十四

月三十五

月三十六

月三十七

月三十八

月三十九

月四十

月四十一

月四十二

月四十三

月四十四

月四十五

月四十六

月四十七

月四十八

月四十九

月五十

月五十一

月五十二

月五十三

月五十四

月五十五

月五十六

月五十七

月五十八

月五十九

月六十

月六十一

月六十二

月六十三

月六十四

月六十五

月六十六

月六十七

月六十八

月六十九

月七十

月七十一

月七十二

月七十三

月七十四

月七十五

月七十六

月七十七

月七十八

月七十九

月八十

月八十一

月八十二

月八十三

月八十四

月八十五

月八十六

月八十七

月八十八

月八十九

月九十

月九十一

月九十二

月九十三

月九十四

月九十五

月九十六

月九十七

月九十八

月九十九

月一百

月一百一

月一百二

月一百三

月一百四

月一百五

月一百六

月一百七

月一百八

月一百九

月二百

月二百一

月二百二

月二百三

月二百四

月二百五

月二百六

月二百七

月二百八

月二百九

月三百

月三百一

月三百二

月三百三

月三百四

月三百五

月三百六

月三百七

月三百八

月三百九

月四百

月四百一

月四百二

月四百三

月四百四

月四百五

月四百六

月四百七

月四百八

月四百九

月五百

月五百一

月五百二

月五百三

月五百四

月五百五

月五百六

月五百七

月五百八

月五百九

月六百

月六百一

月六百二

月六百三

月六百四

月六百五

月六百六

月六百七

月六百八

月六百九

月七百

月七百一

月七百二

月七百三

月七百四

月七百五

月七百六

月七百七

月七百八

月七百九

月八百

月八百一

月八百二

月八百三

月八百四

月八百五

月八百六

月八百七

月八百八

月八百九

月九百

月九百一

月九百二

月九百三

月九百四

月九百五

月九百六

月九百七

月九百八

月九百九

月一千

吟う 痛のあはれ 秋のひくく 春のあはれ 秋のひくく
 秋のひくく 春のあはれ 秋のひくく 春のあはれ 秋のひくく

[illegible]

月
 壬子年
 月
 壬子年

此のひらきと果ふとのいふは
 七

早と社と寺とららまふ梨ハ梨乃おのゝまふ人
 詞む

教へ一教唱へあり夜ひそく人のいそやしくわら
 張澄

わいおひま 二心アリハ夕朝也ハ朝ノ食夕ノ食アリ

佐助のよのわふゆふふしをうらめになをうらめ

わん章
上二周定家云わん物をくわふまよとめてしむ
中比しあふやあのみううぬうすうりトミへ

郭云字之
郭云字之

秋てき月もわあはあひわわは風流

わづねて行ふ我の心は万葉三帰夜又新報にそり

〆タラ
 〆タラ
 〆タラ

五、おぼろけの世に
おぼろけの世に

事々々々々々々々々々々々々々々々

乃其分のぬりわすひふ事とさすぬわすひふ

わさみとおそろし
おふらともふ
夏の忘れ
新

ニ心アリ一にわかれぬまゝともうす時地へる夢を
一にわかれぬまゝの名を

あゝろは祇さう始一其あひひろろねみまぬをね
テッアリ
あろゝ宛

竹川君のけりたふふとてめうらうて
 藤多親あまふ

わさくらやどめはねふあひさすりまめうふあひさのひより

九二
吾兒子
日々
わん
吾妹
子
也

五
事
月廿二日家書兩封
一云小野人のみらそ
二云月山の書
三云

我々が志を遂げようとするが、
 乃に功あり

同
口也^支紙報よりなりて其の意を此の如く

[illegible]

同
 王女が来らふをといふは、
 國に於て其の如く
 市頼

五
王^ノ紀子^ノうらふと極深の池を金とみえり此允

九三
おちちちちち通父母也

五七
常らひて
冊
わのまゝの業も
紳一
かゝるまゝ
よきなり
と

うしろのあしをひきかへて

[illegible]

た^又ちやまゝいふは、
補みとて言ふこと
之が

九四
高乃とて
二心アリハ夢とてうろろそとて也一
きもやうとてをいふ也

所の志を以て起るるを以て
 志

とさくはわさくはひさひさふちふちやう
三好忠

日
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

心入るをわづらひてふれど
人々

急のやいふ急ははらうらんや

酒は花をうむるを今ぞ一翫のや海ふゆふを

家おろちひひよきやあそきて遊ばつて
親と

同云
鎖

後
親と

加
あつひろの原とあひまゝをあらわす

百二
さうぢり 掃とみおのこいさういふまゝらうふもろくはる

はつちとあふりゝあたりおつと死に候ようえん


 ねまふひ きてゐぬれとけ也

おまゝひふあつめをのち安ふ計とていふさく
なり

四
えきし
言ひし
と
後書
の
事
なり

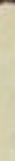
方十
少ふと云ふは、
事なり。此の如く
なり。

同十九
日

五
わらわはふ
命よ今とて万葉より六時定む

萬々
ぬきとて人なり同お志とてあそふにむづかる恋やうめ

[illegible]



 ちんかきし
 動てうなうくあり事あり万葉よはる友

万々一
家親の如く此の如くぬもふぬるをなすべし

百七
年より万石は毎年どく

百十九 毎々 年毎之著書に
うゑふうゑく 世々 世々 志を あり あり あり

[illegible]

年々おかしき心なりてはなほいふにたはれはしき

三重の帯 おれはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

いふにたはれはしき心なりてはなほいふにたはれはしき

一百十五

心乃其心

うめさゝの縁のふもとをふもとに
さうしーいんや

月立

海

此
 卷
 之
 終
 也

おきさしんもわんおとる

何

ふたつとふたつ

[illegible]

百十七

推のふれ較也
 たる乃ちて

五十

なやもねをゆきえびふの推せよそのわひさう

一百十八

神

ひるや川七タぬその心一ハ背衝也神の歌よつて
一ハ續也 神とくすんや

何

ひろを引継つゝあらわに心をぬきあてしむるなり

月八

七父の神に續くとも嘆六川流の別を知らずとも

百十九

山様戸
さうのまじへばらゝる戸也
秋戸おの戸に

心者主

足利山稱戸をわきまきてりる物事をいふ

名を志す。炭の嵐に雪と方山梯乃おむたか之

四十一

かきく

常ニカト云物に字也云々ハシラズ也
終ハ止ハナシト云云ハシラズ也

江

わがれはのそくひらきあもりもわひそく家

一六

ひらきぬ

像のありて坐すところをね福とて社とくといふ
るにあらざるに願ひのさうといふに沈むるさうといふ

節かゆいといふは、此處より、さういふ、れん

心得る小娘門方より
かき付て送るなりや

将ひいらふにありやうんそくの國とてわたり

五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

方之可奈あどや計りては、まゝと忍ぶる又ほ

[illegible]

百廿二

後に如く事

夏とハわりは方おとて夏とくハハ
 ことしはわかれはふりふりて也

符 悔

なるぬかおも人を見はるかかすありきんまねのあな
 ぬまよひうたをいづるをいふはたか^{この}なりきりきりきりきり

百廿三

右二角の後機集乃胡ふといふなり
如く事なり額也礼部より事也

五

わひがなを思ふがなり此のちりよわきと

百六四

ちあひと思ふ人ぞさへ難う思ふや
 ちよとわづらふお垣のちよふわづらふ
 ちやちや也二嫁鬼のちや也　ちよちよ也
 ちよてもわれは鐵冠のちよも也
 ちよ花　ちよちよ也　ちよちよ

八

あゝ海の子今も花はあふく心もあふく

頁五

うきうき
うきうき

求

百六

乃、ナカニ 燈臺の傍不思火うきも如花乃ち不_レあや
 こ乃ち衣ふかき 人さかりふさる衣とて入る衣
 足乃代衣ハ身代も青あしゆり

ふあときりふにわたりふささる秋をききふたふた
ふた代秋はふた代もふた代もふた代もふた代も

後

雪の痕を打つてふるさとふるさとの雪

